

2024年7月14日（聖霊降臨後第8主日、特定10、B年）

牧師メッセージ

「見よ、神の子羊」

（マルコによる福音書6：14-29）

司祭ヨセフ太田信三

わたしたちは聖餐式のたびに、「世の罪を除く神の子羊よ」と祈ります。この言葉は他でもない、洗礼者ヨハネがイエスを指し示して言った言葉です。洗礼者ヨハネは、救い主と人間を繋ぐ重要な存在として、神から遣わされました。ラクダの毛衣を着、いなごと野蜜を糧として荒野で生活した彼は、エリヤの再来と言われ、彼の元にはユダヤ全土から人々が押し寄せました。混迷するユダヤの人々がそれほどまでに救い主を求めていた、と言えますが、彼自身にも強い魅力があったのでしょう。イエスご自身も、洗礼者ヨハネのことを預言者のうち最大のものだと言っています。けれども、彼はどんなに人気があっても、驕らず、高ぶらず、徹底的に「見よ、神の子羊だ」と言ってイエスを人々に指し示し、神からの使命に生き抜きました。そのあまりにも惨い死に方すらも、イエスの道備えとしての役割をまっとうするものでした。

旧約聖書を読み返すまでもなく、人間は神からの言葉を預かり、語る者＝預言者たちを酷い目に遭わせ、殺してきました。彼らを殺したのは、洗礼者ヨハネが殺されたのと同様、権力者や既存の価値観、権威にすぎない人間の思惑でした。ヘロディア、その娘、面子を保つためにその言うことを聞いてしまうヘロデの姿は、まさに預言者を殺してきた人間の姿そのものです。洗礼者ヨハネの死を通して、これら人間の姿があらためて明らかにされるのが今日の福音です。

この洗礼者ヨハネの死により、イエスはいよいよ自らの使命を負って歩み始めます。その歩みの先にあるのは、洗礼者ヨハネ同様、人間の思惑によって殺される、ということです。しかし、イエスはそれでは終わりませんでした。その先の復活へと、歩みは続くのです。ここに、洗礼者ヨハネがその死に方をも、完璧な道備えであったことを感じます。洗礼者ヨハネは、自らの死に様を通してまでも、わたしたちにイエスをこそ見よ、と指し示したのです。洗礼者ヨハネ自身は、死で終わる。けれども、イエスは違う。その先までもあなた方を連れて行くのだ。だから、イエスをこそ見よ、とヨハネは指し示すのです。さらに、彼は自らの死によって、わたしたちに人間の惨さ、罪深さを浮き彫りにしました。しかし、その人間の姿を見つめてこそ、知らされてこそ、イエスの死と復活の出来事がわたしたちにとって、まことの救いの出来事であることを知ることができるのです。最高の預言者とも言われた洗礼者ヨハネをも殺した人間の思惑であっても、神には勝てない。洗礼者ヨハネの死に様をあらためて見つめつつ、洗礼者ヨハネが自らの命を賭して指し示した「神の子羊」にこそ、わたしたちの眼差しを向けたいと思います。今日もまた、「神の子羊よ」と唱え、礼拝をおささげしましょう。